

少年少女のための

8

現代日本文学全集





石長 川塚 啄木 節集

責任編集

久伊福

松藤田

潜清

一整人

NDC 918.6

少年少女のための
現代日本文学全集 8

石川啄木・長塚節集

定価 二五〇円

昭和三十年九月三十日 初版発行

昭和三十一年十二月十五日 再版発行

発行者 小嶺嘉太郎

発行所 東西文明社

東京都千代田区神田神保町二ノ二一

印刷 東京印刷株式会社
製本 協和製本所

この本を読む人に

すぐれた文学者は、この世や人間の真実や、美をすどくみつめて、その作品にはつきりとえがいてくれております。私たちは、それを読むことによつて、私たちの心をゆたかに、美しくすることができます。

この本には、そうしたすぐれた作家たちの代表的な作品のなかから、さらに少年少女のみなさんが、読むのによさわしいもの、ぜひ読んでもらいたいものを、えらんでのせてあります。そして学校で教わらないむずかしい漢字は、かなに改めたり、その意味をしるしたり、またかなづかいも、現代かなづかいになおして、みなさんにしらしみやすいようにしてあります。

その作品も作家のいろいろな面を示すようにしてありますが、あまりに長すぎて、この本のせきれない作品や、もつとおとなになつてから読んだほうがいい部分をよくむものは、その一部をとつてのせてあるものもあります。その部分のとりかたもくふうして、その作品のあらましを知られるようにつとめました。

しかし、もちろん原作をこのように改めたといつても、原作の意図およびそ

の味わいなどは、できるかぎり、そこなうことなく伝えることができるよう苦心しました。だから実際は、このまゝを原作と考へても、さしつかへがないと思つております。

最後に、解説として、その作家の一生や、その作品の説明がつけられております。一つの作品をよく味わうには、それがどのような作家によつて書かれたか、その作家の一生、ひととなりを知ることが、きわめてたいせつであります。それで初めに、解説のほうを読んでから作品のほうを読むことも、作品をよく理解することができる方法でしょう。

この解説も、それを書いた人々が、たいへん興味ふかく、親切にしろしてくれておりますのできつと、作品を読むように、みなさんの心をひきつけてくれるであります。

編集者 久松 潜一

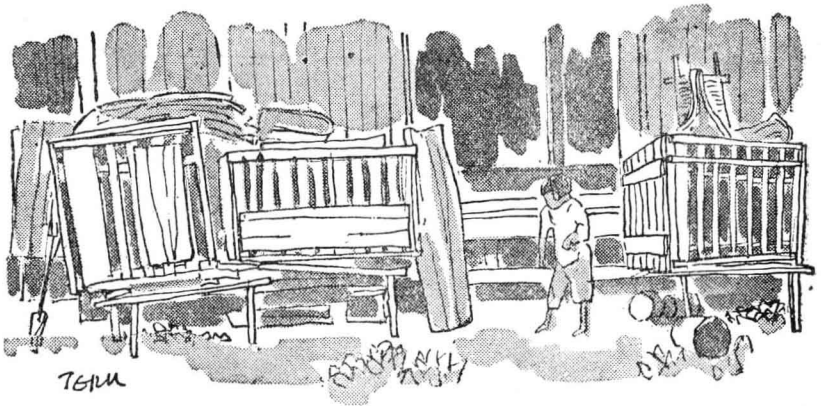
伊藤 整

福田 清人

* 本文中、唐(中朝の号)のように、かっこの中に小活字で入れてあるのは、編集部でつけた注です。

石川啄木集もくじ

一握の砂 <small>いちあくすな</small> (抄)	七
悲しき玩具 <small>かなしくがんぐ</small> (抄)	三六
あこがれ(抄)	四七
呼子と口笛 <small>よびこくちぶえ</small> (抄)	五五
鳥 <small>とり</small> 影 <small>かげ</small> (抄)	五九
天 <small>あま</small> 鷺 <small>ろ</small> 絨 <small>じゆ</small> (抄)	六四
雲 <small>くも</small> は天才 <small>てんさい</small> である	七二
解説 木俣 修	一一三



石^{いし}

川^{かわ}

啄^{たく}

木^き

集^{しゅう}



一握の砂 (抄)

函館なる郁雨宮崎大四郎君

同国の友文学士花明金田一京助君

この集を両君にささぐ。予はすでに予のすべてを両君の前に示しつくしたるものごとし。したがって両君はここに歌われたる歌の一々につきて最も多く知る人なるを信ずればなり。

また一本をとりて亡児真一にたむく。

この集の稿本を書肆の手にわたしたるはなんじの生まれたる朝なりき。この集の稿料はなんじの薬餌となりたり。しこうしてこの集の見本刷りを予の聞したるはなんじの火葬の夜なりき。

著者

明治四十一年夏以後の作一千余首中より五百五十一首をぬきてこの集に収む。集中五章、感興の来由するところ相近きをたずねて仮にわかつてのみ。「秋風のころよさに」は明治四十一年秋の記念なり。

我を愛する歌

東海の小島のいその白砂に
われ泣きぬれて
かにとたわむる

頬につたう

なみだのごわず

一握の砂を示しし人をわすれず

大海にむかいてひとり

七八日

泣きなんとすと家をいでにき

いたくさびしピストルいでぬ

砂山の

砂を指もてほりてありしに

砂山の砂に腹ばい

初恋の

いたみを遠くおもいいずる日

いのちなき砂のかなしさよ

さらさらと

にぎれば指のあいだより落つ

しつとりと

なみだをすえる砂の玉

なみだは重きものにしあるかな

大という字を百あまり

砂に書き

死ぬことをやめて帰りきたれり

目さましてなお起きいでぬ子のくせは

かなしきくせぞ

母よとがむな

ひとくれの土のよだれし

泣く母の似顔づくりぬ

かなしくもあるか

燈影なき室に我あり

父と母

かべのなかより杖つきていず

たわむれに母を背負いて
そのあまり軽きに泣きて
三歩あゆまず

ひょうぜんと家をいでては
ひょうぜんと帰りしくせよ
友はわらえど

ふるさとの父のせきするたびにかく
せきのいずるや
病めばはかなし

わが泣くを少女らきかば
病犬の
月にほゆるに似たりというらん

いづくやらんかすかに虫のなくごとき
ころぼそさを
きょうもおぼゆる

ころよく

我にはたらく仕事あれ
それをしとげて死なんと思ふ

こみ合える電車のすみに
ちちこまる

ゆうべゆうべの我のいとしさ

浅草の夜のにぎわいに

まぎれ入り

まぎれいで来しさびしき心

鏡とり

あたらかぎりのさまさまの顔をしてみぬ

泣きあきし時

なみだなみだ

不思議なるかな

それをもてあらえば心おどけたくなれり

あきれたる母のことばに

気がつけば

茶わんを箸もてたたきてありき

草に寝て

おもうことなし

わが額に糞して鳥は空に遊べり

高山のいただきに登り

なにがなしに帽子をふりて

下り来しかな

いつも会う電車の中の小男の

かどある眼

このごろ気になる

鏡屋の前に来て

ふとおどろきぬ

見すほらしげにあゆむものかも

なにとなく汽車に乗りたく思いしのみ

汽車をおりしに

ゆくところなし

なにがなしに

さびしくなれば出であるく男となりて

三月にもなれり

手が白く

かつ大なりき

非凡なる人といわるる男に会いしに

雨ふれば

わが家の人だれもだれもしずめる顔す

雨はれよかし

高きより飛びおりるとき心もて

この一生を

終るすべなきか

道ばたに犬ながながとあくびしぬ

われもまねしぬ

うらやましさに

真剣まけんになりて竹もて犬をうつ

小児せうじの顔を

よしと思えり

ころよきつかれなるかな

息もつかず

仕事をしたるのちのこのつかれ

しつとりと

水をすいたる海綿かいめんの

重さに似たるここちおぼゆる

目の前の菓子かしざらなどを

かりかりとかみてみたくなりぬ

もどかしきかな

なにがなしに

息いきされるまでかけだしてみたくなりたり

草原くさやなどを

あたらしき背せ広ひろなど着て

旅をせん

しかくことしも思い過ぎたる

浅草あさくさの凌雲閣りょううんかくのいただきに

腕組うでぐみみし日の

長き日記にっきかな

とかくして家をいずれば

日光のあたたかさあり

息ふかくすう

道ばたの切石きりいしの上に

腕うでくみて

空を見上ぐる男ありたり

おどかの心きたれり

あるくにも

腹の力のたまるがごとし

新しきインクのおい

せんぬけば

うえたる腹にしむがかなしも

かなしきは

のどのかわきをこらえつつ

夜寒の夜具にちぢこまる時

はたらけど

はたらけどなおわがくらし樂にならざり

じつと手を見る

水晶の玉をよるこびもてあそぶ

わがこの心

何の心ぞ

大いなる水晶の玉を

ひとつ欲し

それにむかいて物を思わん

ある朝のかなしき夢のさめざわに

鼻に入り来し

みそを煮る香よ

こつこつとあき地に石をきざむ音

耳につき来ぬ

家に入るまで

かなしくも

頭のなかに崖ありて

日ごとに土のくずるるごとし

遠方に電話のりんの鳴るごとく

きょうも耳鳴る

かなしき日かな

あかじみし袴のえりよ
かなしくも

ふるさとのくるみ焼くるにおいす

一隊の兵を見送りて

かなしかり

なにぞかれらのうれい無げなる

ある時のわれのころを

焼きたての

ばんに似たりと思ひけるかな

たんならたらたんならたらと

雨あまだれが

いたむあたまにひびくかなしさ

ある日のこと

へやのしょうじをはりかえぬ

その日はそれにて心なごみき

じつとして

黒はた赤のインクすい

かたかくわける海綿を見る

たれが見ても

われをなつかしくなるごとき

長き手紙を書きたき夕ゆづる

いつもにらむランプにあきて

三日みかばかり

ろうそくの火にしたしめるかな

友がみなわれよりえらく見ゆる日よ

花を買い来て

妻としたしむ

しかられて

わつと泣なきだす子供心

その心にもなりてみたきかな

わがいだく思想はすべて

金なきに因いんするごとし

秋の風ふく

やとばかり

桂首かづら相に手とられし夢ゆめみてさめぬ

秋の夜の二時

煙けむり

病まひのごと

思郷しきやうのころわく日なり

目にあおぞらのけむりかなしも

おのが名をほのかによびて

なみだせし

十四の春にかえるすべなし

青空に消えゆくけむり

さびしくも消えゆくけむり

われにし似るか

かの旅の汽車の車掌くるまじやうが

ゆくりなくも

わが中学の友にてありき

ほとばしるポンプの水の

ここちよさよ

しばしはわかきころもて見る

師も友も知らで責めにき

なぞに似る

わが学業のおこたりのもと

教室のまどよりにげて

ただひとり

かの城しろあとに寝ねにゆきしかな